

63 我が国における長寿研究の系譜

秋坂 真史

今日の我が国では、「長寿研究」の名の下に、老人問題や老化の基礎的研究が盛んに行われている。それではない、これだけわが国の保健行政、政府高官あるいは大学研究者を揺り動かす「長寿科学」なる巨大科学とは何ものなのであろうか。

その理解の一つの方法は、わが国の「長寿科学」の誕生と発展の歴史を吟味することにあると思われる。

長寿に関する研究が興隆してきたのは、それほど昔のことではない。戦前は、日本本土でも沖縄でも、目前の疾病に苦しんでいる人々を救うため個々の具体的疾病の治療を主眼とした調査研究が主流であり、これは当然のことであった。したがって、長寿そのものに着目した研究や著書は意外に少ない。ただしその後、社会の平和と安定、個人の生活にゆとりが生じると同時に、長寿につ

いての考察や研究を行う学者や研究者が現れた。その結果、長寿にいささかなりとも「関連する」研究というのは、見方によってはほとんど無限にあると言つて良いくらいにまでなった。しかし「長寿」というテーマに、「ライフワーク」として本格的に取り組んで、真正面からこれを論述した書物となると、戦前はほとんどみないし、現在でも未だ少ない状況にある。ここで「ライフワーク」を強調すると、後述するように、むしろ江戸時代以前の方が個性的な文献は多く存在している。

本発表では、各年代毎に、全国の長寿研究に関する系譜を追ってみた。

古代・中世日本における長寿研究の系譜

我が国での、広義における「健康と長生き」の研究については、中国の神仙思想の影響を受けて平安時代に「医心方」を撰述した丹波康頼から、我が国独自の養生論が展開された江戸時代に活躍した学者諸氏まで少なくとも数名の先達が挙げられる。

現在の科学的立場からは一部には明らかな誤りも見ら

れるが、ここには具体的な養生の方法が述べられており、必ずしもすべてが誤ったものばかりでもない。むしろ、現在の科学的常識に照らしても、概ね合致する内容と言えよう。大切なことは、平安時代に書かれたこのような書の中でも、既に、食生活、居住環境、気候、体質、性格心理、人間関係、社会そして性生活等に至るまで、幅広く、長寿要因が考察されていることである。

近世日本における長寿研究の系譜

近世には、曲直瀬玄朔の著作が残っている。また、貝原益軒は「養生訓」の著者として有名である。彼は、江戸時代中期の筑前黒田藩の藩士であり儒学者でもあったが、漢籍の知識を基に本草学や和漢の医誌にも造詣が深く、数え85歳で没する前年に84歳で、先の書を完成させた。本書の意義は多々あると思われるが、一つには、もともと近代的にしてより直接的な「長寿の書」であるということがある。つまり、ただ単に、武将の健康管理というのみでなく、対象として一般人の「健康と長寿」について明らかに意識した最初の書と言えよう。